ブータン／　チョモラリ　トレッキング

２０１４．５．６～１８

　タイ　スワンナプームの広い空港内を１㎞程急ぎ、尾翼に黄色とオレンジの地色の上にサンダードラゴンを描いたブータンの飛行機を見つけた。初見参。中型機に搭乗するとファーストクラスの席に２つの綺麗な花束が置いてある。VIP でも乗って来るのだろうか？インドに寄り山の間を下降し、小さく可愛いパロの空港に着陸。窓の外を見ると赤い絨毯が敷かれた。そしてワンチュク国王を先頭にペマ王妃が続く。そして、王妃が、国王が振り向かれお顔を拝見出来たのである！感激。国王は黒のゴを、王妃も地味なキラの装い。専用機など使わず（無い？）、一般人と一緒の機をご利用なさるその姿勢にまず感銘を受けた。空港に降り立つと『幸せの国』の気が満ちているのに更に驚く。

若い、ゴを着たイケメンガイド、タシさんが出迎えてくれた。運転手も勿論ゴ姿。仕事をするときは着用が義務づけられている由。通学の小学生のゴ姿も愛らしい。学校により色柄が違う制服という。膝丈のゴに黒のハイソックス、靴も殆どが黒で、磨かれピカピカ。袖先に白い筒状の布をつけてとてもお洒落ないでたち。女性のキラはチベットの女性の民族衣装に似ているが色柄はブータンの方がカラフルでセンスが良い。

ブータンは九州よりちょっと広く、人口は（大田区と同じ位の）70 万人だそうだ。
収入は水力発電による電力輸出と観光収入のみであとは外国からの援助という。観光客は年間 2～3 万人で日本人が一番多く 3～4 千人。観光収入の一定割合を国に収め、それを教育費・医療費に半分づつ使い共に無料であるという（トレッキング中アメリカ在住の日本人という 80 歳近い男性から『命の次に大事な薬を忘れてしまったが、ブータンで受診し薬を貰ったが無料でした』と感無量の話を伺った）。

5／7　空港からパロ川に沿い、パロの町を抜けてホテルに行くのだが、この町の小さいこと。1.5 ㎞弱で尽きてしまう。それでも日用品店やレストラン、ホテル、土産物店それなりに。土産物店はここ 1～2 年で増えたようだ。町を過ぎた小高い所にあるホテルはここ数日会議があるとかで、大勢の人と車で賑わっている。離れの一棟は私達だけで、部屋は 100 ㎡はあろうか？キングサイズベッド2つと立派なソファー等調度品に面食らい、バスルームは広くて寒そう…。シングル参加の 2 人は広すぎて落ち着けないと言っていた。
この後 3988mのチェレ・ラ峠へ高度順応に出かける。

敬虔な仏教徒多い国故あちこちにタルチョがはためく。ネパール等と違うのは、日本の 5 月の節句の幟のように縦型が多いこと。道すがらず～っと両側に、ピンクの球形に花が付いたサクラソウが咲き誇っていた。

5／8　昨日チェレ・ラから遠望したタクツァン僧院へハイキング。この僧院はパロ谷にそそりたつ岩山の断崖に張り付くように建てられている。最初こそ森林の中の緩やかな道だが、第 1 展望台を過ぎると傾斜が増してくる。最後の下って上る石段がきつい。バター灯明で火災多く最近では 1998 年焼失、2004 年に再建されたという建物は丁寧な造りで美しい。外見では想像もつかない広さで且つ荘厳。仏像の気高い面差しに射すくめられる感覚はかってない経験である。夕方トレッキングの基地となるシャナに移動する。

ブータンの人たちの収入が多いとは思えない。舗装された道路は幾らもなく、殆どが未舗装で数も少ない。インフラも整ってはいない。しかし広そうな家のたたずまいや緑の山々、棚田、畑等を見ていると幸せって何だろうと思わせられる。聡明な第 4 代国王が『価値は収入ではなく人々の幸福感にある』と考えたのは凄いことで、世界中が目からウロコと思ったのではないか？　東日本大震災の後、若き国王夫妻が訪日されたこともあり日本人はブータンが好きだ（旅行前行った酒屋の従業員の方も『あの幸せの国に行くのですか？』と知っていた）。国王は災害に見舞われた地や、僻地住民の意見を聞きに山奥まで自分の足で歩いて視察に行かれる由。国民の幸せを第 1 に考える姿勢は日本の天皇に似ている。このようなリーダーだから『幸せの国』を作れるのだろうな。　言葉を浪費し、口先だけで実のない Abe という為政者とは天と地の違い。

シャナでは既にテントが張られ、食事の準備が進んでいた。リーダーのツェリンさん、コックのソナムさん、アシスタントや馬方（10 頭が行動を共にする）などスタッフ計 5 人が紹介された。皆とても若くて純朴だが頼りがいのあるメンバー

である。翌日ツェリンさんが長い数珠を繰り、経を唱えながら歩いているのには驚いた。若くてもチベット仏教を信ずる敬虔な方なのだ。

（とうとう地べたを這う径 5 ミリのサクラソウが…）

5／9　トレッキング開始。緩やかなパロ川沿いを行く。ショウジョウバカマ、サクラソウ、カイドウなど見る。2 時間ほどでシンカラップ着、1 軒の店（これからも出てくるが少量のお菓子、ジュース類、量り売りのウィスキー（！）など売っている）。3 歳の男の子、犬の親子。いじめられ、怒られたことが無いのだろう犬や馬など動物の穏やかで安心して生きている様子が良く分かる。生き物にとってこれ以上の幸せは無いだろう！

お昼は川の畔で。昼食を持って一緒に歩いてくれる一番年配（？）のコック助手のアタさん（どこかマンデラ氏に似ている）、昼食が終わるとキャンプ地に向け出発して行った。毎日このような形でガイド助手以外は先に進む。この助手氏もタシさんと言い、ガイドの研修生として加わっている様子。

初めて見るワインカラーのサクラソウの印象は強烈。46 種類のシャクナゲがあるそうで、最初は真紅が多い。やがて黄色、オレンジ色で形が筒状の花を見る。ザクロやウツギの花に似ている。勿論初めて見るもの。両岸に山が見えるがチョモラリはまだ姿を現さない。タンタンカのテン場に 15：45 到着。小さなマーモット見る。夕食はゼンマイ煮、ヒラタケとチーズの煮込み、川魚の唐揚げ、ツナサラダ、赤米。これから出て来る肉や魚はすべてインドからの輸入品の由。野菜は日本と同じものが多い。そして同じ料理が二度出ることは無かった（松茸だけは特別に 2 回出してくれたが）。

5／10　広いキャンプ場にテントが他に 3 張。年配の男性が出て来て、『上りか下りか？』と英語で問うた後、『日本から？』と聞くのでそうだと答えると『自分はアメリカに住んでいる日本人』と言い会話が始まる。『日数を要し、かなりハードな周回コースで山を歩

く予定が自分がダウンして、チョモラリベースキャンプから氷河湖まで登って戻って来た』と。友達、アメリカ在住の娘さん、ドイツに住む息子さんと 4 人で山登りに来たという。この方が件の“薬を忘れて来た方”で加地さん。奥さんはアメリカ人の由。
ユタ州に住んでいてロッキー山脈が近いので案内するからいらっしゃいと誘われ、メルアドを交換。いつかそれも良いなと思ったりして…。
7：45 出発。中国との国境が近いのでインド軍とブータン軍の宿舎が近接してある。
シャクナゲは優しいピンクに替って来た。道は昨日ほどのアップダウンは無いが距離はそれなりに。水量の多い川に沿って何度も橋を渡る。荷駄を積んだ馬が通るのでしっかりした橋だ。所々に家がある。よくもこんな山奥に。ヤクを放牧して生業としているのだろう。ヤクは今の時期子供を連れていて可愛らしい。たくさんのヒマラヤアイリスが出てきた。花の径と高さが同じ約 7 cm。3 年前のランタン谷で見たものだが、その数は数倍以上で、どこもかしこも青紫の大群落。高山植物の生き残る術はヤクや馬などに食べられないこと。周りの草は食べられて 1cm の丈も無いのにアイリスもサクラソウも無傷。毒を持つのだろうその戦略はたいしたものだ。
オオワシを見る。ベースキャンプの 2km 程手前に開けた場所があり学校と農林業の普及所などあり、近くに先生の住居や民家が数軒ある。駆け回っていたゴ、キラ姿の子供達が 5 人シャクナゲを手にして迎えて（？）くれ、花をくれるではないか。1 年から 5 年生までのこのシャイな子供達と同じ表情は他の国では中々見られなくなってしまった。
今日は土曜で学校は半日。川を渡り左へ曲がりこむと谷の奥にチョモラリ（7314m）が現れた。一部雲に覆われている。が、刻々と姿を変えていく。キャンプ場着（標高約 4000m）14：15。嘴の黄色いカラスの大群がいた。夕食の缶詰だという松茸の美味しいこと！

5／11　朝チョモラリが惜しげもなく全容を見せてくれた。氷河を抱いて白く輝き神々しい。氷河湖へのハイキングに出掛けようとしているとヘリが 2 機飛んで来た。タシさんによると、年配の欧米人女性 2 名が体調不良でヘリで下山するという。ブータンに救助用ヘリは無く、政府からインドへ出動要請をするのだという。加えて 1 機 1 名。費用は 2000 万円（？？）になるとか。保険に入っているとしても大変な金額である。
対岸の急なモレーン上の山道に取りつく。サクラソウの丈が 3cm→2cm→1cm　そしてとうとう地べたにくっついてしまった。花の径は一貫して 5ｍｍほど。この小ささは何なのだ！チョモラリの隣のジチュダケ（6809m）がマッターホルンのような山容を見せ始

める。ヤク放牧の為の仮小屋が２つあった。ここからは緩やかな道を氷河湖へ。キツネほどに大きいマーモットが２匹立ちあがって（ジャレて？）格闘している様子はとても面白い見もので、たくさんいるので何回も見る。2 つの氷河湖は緑色で美しい。ヤクが水の中に入っていて、冷たくないのかと余計な心配をする。クリーム＆緑色のつがいの鳥がゆったりと湖の上を飛ぶ。今日はスタッフは停滞日でコックのソナムさんがお昼を持って同行して下さった。デザートが生のマンゴー1 人 1 個には驚いた。目が良いスタッフが氷河湖の上部遥か彼方にヒマラヤンブルーシープの群れを見つけ、15 頭以上いると言う。私達は長い時間かけてやっと特定、ゴマ粒のような羊を見た（タシさんが望遠で写真を撮ってくれたらはっきり写っていた)。
ブータンの撮影クルー2 人が女優さん（？）2 人と登って来たりもした。14：10 戻る。

5／12　7：35 下山開始。学校の前には全校児童 12 人が勢揃いしていて再び交流。さようなら山の子供達！　下りは早い。蕾が固かったブルーポピーが開き始め、美しい青色を見せている。1 日掛ったタンタンカまで半日でたどり着くと、往きには見えなかったチョモラリが見えた。北面の大岩壁も見えた。14：10 初めてのキャンプ地トンゴサンバに着く。私達のテントだけでとても良いところ。川で遊ぶ。

今日がスタッフと過ごす最後の夜ということで、盛大なキャンプファイアーが準備されていた。取っておいたウイスキーと、用意して下さった国産ワイン 2 本（本格的な製法技術がまだ確立されていないのか、色も良くなくドロッとして正直美味しくなかった)。打ち上げに手作りケーキも出て、外で食事とお酒を焚火で温まりながら楽しんだ。

5／13　7：40 出発。静かなルートのトレッキングもいよいよ終わる。若いタシさんは 2 時間休まずブッ飛ばす。下りだがついて行くのがやっとだ。昨日予定より下まで下っていたので出発地のシャナに 11:45 着いてしまった。ここで最後の昼食をご馳走になる（再度松茸！）食欲が無いにも拘わらずたくさん食べてしまうこの意地汚さ！（というか美味しさ）。中型の私達 4 人には大きすぎるバスが迎えに来て、名残惜しいスタッフと別れパロのホテルに戻る。途中でパロ到着夜 8 時という 10 頭の馬を連れたドウティさんが炎天下を歩いて帰るのを追い抜いた。お疲れ様そして有難う！帰って久しぶりのお風呂。

ブータンの国の統治は国王と宗教指導者（現在は 70 代）の 2 人でなされるという。
ゾンと呼ばれる県庁兼寺院の役割（裁判所もある）を持つ歴史のある立派な建物が行政区である各県にある由。ゾンも家も白が基調で黒、茶、黄、渋い赤が装飾に使われ、日本人が好む色合いである。

14 日　パロ・ゾン見学の後、農民家を訪ね日常生活を見学。家は広く仏間は立派である。TV、ミシンや冷蔵庫、炊飯器、ベッド、ソファもあり、運転手さんの家であることを知る。兄さんがスリランカで医者になる勉強中で妹さんは高校生の由。バター茶と農家のお昼を頂いて、畑にある焼けた石を投げ込んで温める野天風呂まで体験する。小さな町を歩いた後、小 1 時間で首都テインブーへ。大きな建物が目立ち始め、舗装された道を多くの車が走っている（トヨタ、スズキ、韓国の車多し）。織物工場見学。10 人ほどが繊細な織の作業をしていた。

15 日　プナカへの観光のため、朝早い出発は道が拡幅工事中で 3 か所で時間規制があるというので。3105m の峠ドチュ・ラへ。ここで黄色いサクラソウを見つけた。最高峰やヒマラヤ高峰のビューポイントというが、雲に閉ざされ見ることは叶わなかった。暖かいプナカはポインセチア、ブーゲンビリア、ハイビスカスなど咲いている。たくさんのジャカランダを前景にした美しいプナカ・ゾンが川向こうに見えてきた。何という素晴らしい光景だろう！ジャカランダの芳香が漂う。遠目にはサクラのような花付きに見えるが実際は筒状の花であり、薄紫色。ここは 2 番目に古い由緒あるゾンで 1955 年までの首都。内庭には大きな大きな菩提樹があった。

午後チミ・ラカンへミニハイキング。
帰りの道も渋滞で時間が掛った。砂岩と思われる崖の、のり面は削っただけのもので、いつまた雨や風で崩れるかもしれない怖さがある。埃っぽく拡幅も大変だ。
テインブーに戻り、夕食後ライトアップされたタシシェ・ゾンを見に車で高台に行く。

16 日　朝町なか散歩。センダンの花が良い香りを放つ。9 時出発でメモリアル　チョルテンへ行くと大勢のお年寄が数珠を繰りながら建物の周りを回っている。五体投地をしている人も。学生も夕方には大勢参るそうだ。続いて 50.5m あるというブッダポイントへ。帰り道国王の住居が見える所で車止る。タシシェ・ゾン、国会議事堂の隣によく分らない程小さく地味な家が…。この後国王が執務するタシシェ・ゾン（このゾンは大きく立派で美しい）見学時、傍にある住居の一部が見えたが、簡素というよりも質素に近いような建物だった。何という清貧さ！ミーハーの私は国王がますます好きになる。
コウゾを使う製紙工場を訪ね、その後ただ 1 か所ある優雅な手つきで交通整理をするお巡りさん信号に暫し見とれた。民族衣装を着せて貰っての伝統舞踊鑑賞は楽しかった。

　ブータンは今　――思ったまま
☆　物売り、物乞いは一人としていない
☆　やみくもに市場開放はしない
☆　首都テインブーは建設ラッシュ。仕事のない農村から青年が大勢流入している（夜中まで大声で騒ぐ）、犬の顔つきも他とちょっと違い険しい
☆　若者は皆スマホやアイパッドなど持っている
☆　通学時歩きながらノートを見て勉強している学生もいる

この日議員 72 人という国会（二院制）が始まり、ＴＶ中継され国王が汚職なきよう戒める話しをなさったとタシさんが教えてくれた。若く英明な国王も悩み深いことだろう。
夕食はドライバー、ガイド助手氏を含め皆で打ち上げとした。再会を約して…。　　了

（たった一株の白。突然変異か？ヒマラヤンアイリス、右上はサクラソウ）